



Data

監督・脚本: グザヴィエ・ポーヴォ
ワ

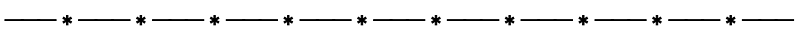
原作: エルネスト・ペロシオン

出演: ナタリー・バイ/ローラ・ス
メット/イリス・ブリー/シ
リル・デクール/ジルベール・ボノー/オリヴィエ・ラ
ブルダン/ニコラ・ジロー/
マチルド・ヴィズー=エリー
/マリー=ジュリー・マイユ

👁️👁️ みどころ

第一次世界大戦の塹壕戦の悲惨さを描いた名作は、『西部戦線異状なし』(30年)をはじめとしてたくさんあるが、「銃後の女たち」に焦点を当てた本作は興味深い。ベートーベンの交響曲第6番『田園』を聴き、ミレーの名画『落穂拾い』や『種まく人』を見れば、100年前のフランスの農場ののどかさを想像するが、本作を観ればそこで働く女たちの重労働ぶりがよくわかる。しかし、本作の主人公となるフランシーヌの場合は・・・？

戦場に赴く男たちの生死はすべて時の運。しかし、銃後を守る「田園の守り人たち」たる母娘はたくましく、したたかだ。そんな「田園の守り人たち」の姿と、ある事情でそこから排除されながらも、戦後の新しい時代を赤子を抱えて自立していくフランシーヌの姿をじっくり味わいたい。



■□■ 『田園』と聞けば？本作の種まき風景を見れば？ ■□■

「田園」と聞けば、何よりもまずベートーベンの交響曲第6番『田園』を思い出すと共に、冒頭のあの軽やかなメロディをロザさむ人が多いはず。また、本作のチラシにある、畑の中を2人並んで歩きながら種をまいている画像を見れば、ミレーの名画『落穂拾い』や『種まく人』を思い出すはずだ。もちろん、そんな風景は今のフランスには存在しないだろうが、今から100年前の第一次世界大戦当時のフランスの田舎には、そんな風景が広がっていたらしい。この田園風景を見ていると一見のどかで平和そうに見えるが、なぜ種をまいているのが女性2人なの？そんな疑問を持つと、第一次世界大戦下のフランスでは成年の男はほぼ全員戦争に駆り出されていたため、という何とも悲痛な現実を知ること

になる。

本作には男も登場するが、ストーリーの軸になるのは、長男コンスタン（ニコラ・ジョー）と二男ジョルジュ（シジル・デクール）を共に戦場に送り込み、近所に嫁いだ娘ソランジュ（ローラ・スメット）と共に農作業に追われている未亡人オルタンス（ナタリー・バイ）。本作全編を通じて映し出される農作業の風景を見れば、種まきから収穫までの農作業がいかにも重労働で、女手だけでは過酷なものかがよくわかる。

オルタンスは毎日その先頭に立って働くだけでなく、収穫から管理、販売まで全体のマネージメントもやっているから、その責任は重大。娘のソランジュは夫クロヴィス（オリヴィエ・ラブルダン）を兵隊に取られ、義理の娘マルグリット（マチルド・ヴィズー＝エリー）と共に、そんなオルタンスを忠実に補助しながら夫の留守を守っていた。

しかして、本作の原題は『Les Gardiennes』（＝田園）だが、邦題は『田園の守り人たち』とされているから、なるほど、なるほど……。しかし、なぜ今そんな映画が日本で公開されるの？

■□■フランス人にとっての第一次世界大戦とは？■□■

本作は、「エキブ・ド・シネマ45周年記念作品」として公開された作品だから、パンフレットにはクソ難しい(?)解説、コラムがたくさん収録されている。その1つが、剣持久木氏の「フランス人と第一次世界大戦」だ。これによると、第一次世界大戦でドイツに勝利したフランスは、再び第二次世界大戦でナチスドイツとの戦いを余儀なくされたが、両国間の戦闘に限るならば、第二次世界大戦の規模は第一次世界大戦に比べて遙かに小さいため、フランスにとっての“空前絶後の大戦”といえ、今でも第一次世界大戦のことで、フランスではそれを「大戦争」と呼んでいるようだ。第一次世界大戦の塹壕戦（の悲惨さ）を描いた映画の代表作は、レマルクの小説を映画化した『西部戦線異状なし』（30年）だが、近時の『戦火の馬』（11年）（『シネマ28』98頁）も同様の名作だった。

しかして、本作もある意味ではそれと同じような戦争映画だが、本作にはド派手な戦闘シーンは一切登場しない。本作冒頭には戦場での死体の山が映し出され、また、ジョルジュの夢で戦場での殺し合いのシーンがフラッシュバックとして登場するが、これらはすべて無言で流されるのみ。それが徹底しているから、本作を第一次世界大戦の塹壕戦を描いた戦争映画と期待すると大間違いになる。私たち日本人は第二次世界大戦における対ナチス戦争と異なり、第一次世界大戦はフランスにとってしんどかったけれども栄光の戦争と思っているが、実は……？

■□■本作の『フランシーヌの場合』は？■□■

私が大阪大学に入学したのは1967年4月。同大学では、大学の生協問題に端を発した「大学紛争」が起きていたが、当時の全大学に共通する、戦うべき政治テーマはベトナム

ム戦争反対だった。そのため、当時はジョーンバエズの『花はどこへ行ったの』や『ドナドナ』、そしてボブ・ディランの『風に吹かれて』等の反戦フォークソングが大ヒットしたが、和製の反戦フォークソングとして大ヒットした曲の一つが『フランシーヌの場合』(69年)だった。これは、1969年3月30日の日曜日、パリの路上でフランシーヌ・ルコント(当時30歳の女性)が、ビアフラの飢餓に抗議して焼身自殺した事件に触発されて作られた曲だが、新谷のり子が歌ったシンプルな同曲は、カルメン・マキが歌った『時には母のない子のように』(69年)と同じように、私が学生運動に明け暮れていた時代に大ヒットした。

それに対して(?)、本作のフランシーヌ(イリス・ブリー)は休暇届けで一時帰郷していた長男コンスタンが戦場に戻った後、収穫期が迫り人手が不可欠となる中、オルタンスが雇った20歳の女性だ。男手には到底ありつけないため、オルタンスは仕方なく、また紹介者の言葉を信用して、面接を経ることなくフランシーヌを雇ったわけだが、フランシーヌは誠実な働き者だったから、その雇用は大正解。本作導入部では、オルタンスとソランジュの指示に従って、とにかくよく働くフランシーヌの姿に注目!

4月30日に見た『幸福なラザロ』(18年)でも、ラザロは誰から仕事を言いつけられても嫌な顔一つせず黙々と働いていたが、フランシーヌもそれと全く同じだ。その上、休暇で戻ってきたソランジュの夫クロヴィスが厳しい戦況を目の当たりにして酒の量が増えている中、フランシーヌの歌声は彼の重苦しい気持ちを安らげる役割も果たしたから、女の力は偉大だ。もっとも、クロヴィスの場合はそれとどまっていたが、クロヴィスと入れ替わるように次男ジョルジュが休暇で戻ってくると、スクリーン上からは2人が互いに惹かれあう雰囲気グンと伝わってくる。それはそれで悪くないのかもしれないが、ジョルジュはいわば地主の息子であるのに対し、フランシーヌは孤児院で育った一時雇いの労働者。したがって、この2人は身分の釣り合いが取れていないことが明らかだ。

2人の仲を知らないオルタンスは、誠実な働き者で男にも全く劣らないフランシーヌを(労働力として)気に入り、契約を更新したばかりか、「戦争が終わってからもこの家に来てくれ」と申し出て、フランシーヌも喜んでそれをOKしたから、オルタンスの農場の経営は万々歳。フォークソングの『フランシーヌの場合』は、フランシーヌは焼身自殺という悲惨な結果になったのに対し、本作の『フランシーヌの場合』は、ゆったりと進んでいく美しいスクリーン上の展開の中で、全てが順調に進んでいくように思えたが・・・。

■□■「大戦争」の西部陣線におけるアメリカの役割は?■□■

1914年6月28日にオーストリア皇太子夫妻がサラエボで暗殺されたことを契機として起きた第一次世界大戦は、1917年1月にドイツがUボートによる「無制限潜水艦作戦」を決定したことを受けて、それまで不干渉主義を貫いてきたアメリカのウィルソン大統領が4月6日に連合軍側への参戦を決定したのは有名な歴史上の事実。

剣持久木氏の『フランス人と第一次世界大戦』にある『第一次世界大戦略年表（西部戦線を中心に）』によれば、アメリカ軍の第一陣が、フランスのサン・ナゼール港に上陸したのは1917年6月、実戦参加は同年11月だ。私たち日本人は、第二次世界大戦におけるノルマンディ上陸作戦を『史上最大の作戦』（62年）等によく知っているが、第一次世界大戦の西部戦線で、アメリカから派遣された兵隊がどのような役割を果たしたのかについてはほとんど知らない。ジェームズ・ディーン主演の『ジャイアンツ』（56年）で観たように、アメリカでは19世紀末から石油採掘ブームが起き、産業の中心が牧畜農業から石油に移っていく中、フォードによる大衆車の大量生産が急速に進んでいたから、新大陸の新興国家アメリカは、ヨーロッパの中で互いに争い合うフランスやドイツとは全く異質の、自由と繁栄を謳歌する国だった。すると、その国からフランスの応援のために西部戦線にやってきたアメリカ兵たちの役割と言動は？本作中盤では、私をはじめ観るそんな興味深いストーリーが展開されていくので、それに注目したい。

アメリカ兵が陽気で明るいのは、第一次世界大戦でノルマンディに上陸したアメリカ兵が、解放軍としてパリに乗り込んできた後の姿を見ればよくわかる。つまり、彼らは、すぐに美しいフランス人女性とねんごろになり、多くの良い思い出を作ったわけだが、第一次世界大戦の場合は？ちなみに、太平洋戦争後に敗戦国たる日本に駐留してきたアメリカ兵も陽気で明るく、気前が良かったため、一方では子供たちは「ギブ ミー チョコレート」と叫びながらアメリカ兵を追っかけていたが、他方では、田村泰次郎の小説『肉体の門』（47年）に描かれたような悲劇もたくさん生まれていた。本作に登場する数名のアメリカ兵はとにかく陽気で屈託がなく、女性に対して何かと開放的だが、ひょっとしてその矛先がフランシーヌに向かうのでは？あるいはソランジュに向かうのでは？私はそんなリスクを考えながらスクリーン上を覗いていたが、ストーリーは意外な方向へ……？

■恋の行方は？女の闘いは？■

第一次世界大戦は1914年6月から1918年11月まで4年余り続いた。本作は1915年からスタートし、女たちは一貫して農場を守り続け、男たちは西部戦線への出征を続けるが、その間、ソランジュの夫クロヴィスはドイツ軍の捕虜になり、オルタンスの長男コンスタンは戦死が伝えられるから、「銃後の女」たちも大変だ。もっとも、寺島しのぶがベルリン国際映画祭で銀熊賞を受賞した『キャタピラー』（10年）では、四肢を失い言葉を失った夫が「軍神サマ」として故郷に戻ってきたから、これは「名誉の戦死」以上の悲劇だった（『シネマ25』215頁）。それに比べると、本作では2度目の休暇で戻ってきたジョルジュが、フランシーヌとの何とも微笑ましい(?)恋模様を展開するので、フランスにとつての「大戦争」がいかにも悲惨だったとはいえ、太平洋戦争で体験した日本兵の悲惨さに比べるとまだマシ……？それはともかく、ジョルジュが案内した秘密の森で2人がベッドイン(?)する姿は、いかにも田園風だ。そんな2人の恋模様の中でも、陽気

で遊び好きなアメリカ兵がウロウロしている姿が気になったが、ある日ソランジュがその中の一人とコソコソと……。そして、そんな噂が耳に入ったオルタンスが、ある日ソランジュのそんな姿を目撃したから、大変だ。

本作を監督したグザヴィエ・ボーヴォワは、『チャップリンからの贈りもの』(14年) (『シネマ36』78頁)の監督で、フランスでは有名らしい。もっとも、彼は1967年生まれだから私より22歳も若い、休暇を終えたジョルジュが戦場に戻る日、母と息子が馬車で駅に向かう途中、たまたまアメリカ兵に抱き寄せられてキスを迫られているフランシーヌの姿を目撃するシーンを登場させるので、それに注目！私はそれを見た時、そのシークエンスの意味を十分理解できなかったが、オルタンスは馬車の中でフランシーヌの素行の悪さを言い募り、「彼女がアパスレだと？」と聞き返すジョルジュに対して、「ああいう子は何でもする、生まれつきだ」と答えたから、アレレ……。オルタンスは一体何を企んでいるの？

オルタンスからそれを聞いたジョルジュは、「フランシーヌを追い出すように」と母に言い残して列車に乗ってしまったうえ、オルタンスはフランシーヌに対して解雇を伝えたが、これは弁護士の私の目には明らかに不当。しかし、まともな労働法制など存在しない100年前のフランスでは、フランシーヌはそれを受け入れるほかなかった。しかし、なぜオルタンスは突然フランシーヌに対してそんな態度を取ったの？後にそれは、ソランジュにかかっているアメリカ兵との良からぬ噂話をフランシーヌに振ることによって、「家族を守るため」だったことが明らかになるが、そりゃ、あまりにあまりだ。

しかして、本作の『フランシーヌの場合』も、フォークソングの『フランシーヌの場合』と同じように、農場におけるアメリカ兵の登場と女の闘いの中、フランシーヌは「農場からの追放」という過酷な運命に追いやられることに……。

■□■大きなお腹を抱えたフランシーヌの決断は？■□■

オルタンスの農場を不当解雇されたフランシーヌは、オルタンスが好意的に示した2か月分の給料も「いらない！」とはねつけ、その後は炭焼きを生業とする、幼い娘を抱えたモネット夫人(マリー＝ジュリー・マイユ)の下で働き始めていた。そこで、最近食欲がなく、よく吐き気がする」と訴えると、モネット夫人から「妊娠だ」と告げられたから、ビックリ。さあ、結婚できないままジョルジュの子供を宿したフランシーヌは、どうするの？本作はそこから結末部分に入っていくが、ここではフランシーヌの決断に注目したい。

フランシーヌの決断の第1は、子供を産むか産まないかの決断。第2は、その父親であるジョルジュに対して、子供が生まれることを知らせるかどうかの決断。第3は、戦争が終わった後、女手一つで幼い赤子をどう育てていくのかの決断だ。一般的な「弱い女」なら、地主の息子が休暇で戻ってきている間に「いい仲」となり、その子供を宿すと、泣いて結婚を迫るシナリオも考えられるが、本作中盤に見るフランシーヌの意思の強さを見る

と、それはありえない。そんなフランシーヌがオルタンスに宛てた、「ジョルジュは私が愛した唯一の男性であり、もうすぐ父親になると伝えて欲しい」と書き送った手紙は感動的だが、それを受け取ったオルタンスの対応は？

本作のラストに向けては、無学ながらも、あの当時の自立する女だったフランシーヌの、大きなお腹を抱えた中での決断に注目したい。

■□■大戦後の農場は？大戦後のフランシーヌは？■□■

1918年11月に激しかった大戦争が終わると、オルタンスの農場では、負傷をしながらもジョルジュが帰還してきたので家族は大喜び。また、ソランジュがアメリカ兵の置いて行ったトラクターを購入していたから、ジョルジュに続いて帰還したクロヴィスも大喜びだ。それはそれでいいのだが、家族が集まると、戦死したコンスタンの土地を巡って、クロヴィスとジョルジュの言い争いが始まったからアレレ……。それをみたソランジュは、「戦死したコンスタンの土地を取り合うなんて情けない」と涙を流したが、それに対してオルタンスは、「私はうれしいの、昔に戻ったようで」とつぶやいたからすごい。

他方、「髪は女の命」だから、戦争中の重労働の中でもフランシーヌの髪は長かった。しかし、本作ラストに向けては、戦争が終わり、1人で息子を育てているフランシーヌがある日髪をバツサリと切り、モダンになった自分の姿を鏡の中に見て微笑むシーンが登場するので、それに注目！これはある意味、終戦後の日本にモガ（モダン・ガール）と呼ばれる短髪の女性が登場したのと同じだが、フランシーヌの場合は、重労働で働いて貯めたお金で自立するという意思が明確だからすごい。そして、本作ラストには、人々がダンスに興じている社交場で、楽団をバックに軽やかな歌声を響かせているフランシーヌの姿が登場するのでそれにも注目！

「大戦中」の男たちは根無し草のように戦場と故郷を往来したが、「田園の守り人たち」になった女たちのたくましさとしたたかさはすごい。『風と共に去りぬ』（39年）では、スカーレット・オハラのとくましさとしたたかさがテーマだったが、本作ではそれに勝るとも劣らないオルタンスやソランジュ、そしてフランシーヌたちのたくましさとしたたかさをしっかり確認したい。

2019（令和元）年7月29日記